

# Operation Raleigh News



Operation  
Raleigh

DENSO

**No.2 第2号** 昭和59年(1984)11月5日(月)  
毎月1回発行

●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会  
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号  
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装株式会社のご協力で制作されたものです。

## 旗艦S.W.R. サー・ウォルター ローリー号

### いよいよ英国出航へ



## 第2陣の3青年 元気にロンドン到着

オペレーション・ローリー1984年次派遣青年第2陣、橋本かおりさん、伊藤由樹子さんは10月29日(月)午前11時00分発キャセイパシフィック航空機で、また、戸上忠頭君は同日午後9時30分発のKLMオランダ航空機で成田を飛び立ちました。成田空港には、日本電装、ORJC事務局員、派遣メンバーらが見送りました。

3人は、10月30日朝(ロンドン現地時間)元気にヒースロー空港に到着、2日間ロンドンに滞在し、OR本部などを訪問した後、旗艦サー・ウォルター・ローリー号の待つ英国

東部の港湾都市ハルに向かいました。

サー・ウォルター・ローリー号はこのハル港から出航することになっており、出航式には、チャールズ皇太子も出席されます。

#### ■ハル市

公式には、キングストン・アポン・ハルといい、人口約30万の港町です。英国東部では屈指の港をもち、貿易



成田空港で橋本さん(左)伊藤さん(中)

#### タワーブリッジの下を航行するサー・ウォルター・ローリー号

のほか、造船、化学工業などもさかんです。大学、博物館、美術館などもよく整備された歴史のある街です。

#### ■サー・ウォルター・ローリー号

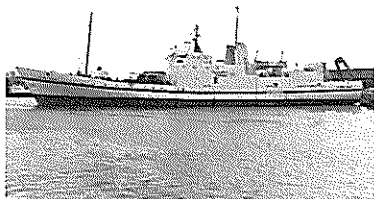
1966年、トロール船として建造されました。10年後には海洋調査船に改造され、ブリティッシュ・バイキング号と命名されました。さらに本年、オペレーション・ローリーの旗艦として改修され、サー・ウォルター・ローリー号と名づけられました。

- 大きさ/全長83.6m、幅13.6m、トン数1,890トン
- エンジン/3,000馬力ディーゼル、可変ピッチプロペラ駆動
- デッキ機械/クレーン、ウインチなど

サー・ウォルター・ローリー

# S. W. R. 号

## 探険旅行日程



11月13日(火)に英国ハル港を出発するサー・ウォルター・ローリー号の探険旅行日程は次のとおりです。

●11月1日(木)

S. W. R. 1Aのメンバー、ハルにて乗船。

●11月1日(木)▶13日(火)

基本的な訓練、必需品の積み込み作業を行なう。

●11月13日(火)

ハル港で出航式。チャールズ皇太子が舵取り。4年間の航海に対する関係者や市民の見送りを受ける。

●11月15日(木)

ジャージー島(英領・イギリス海峡)寄港。17日(土)出航。

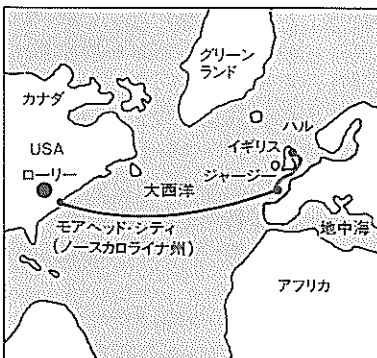
●12月上旬

米国ノースカロライナ州モアヘッド・シティに入港。

●12月上旬▶下旬

米国ノースカロライナ州を中心に、科学探査、コミュニティ活動、冒険のほか、各種の歓迎式典に出席。

(ノースカロライナ州での活動については、3面に詳報)



●S.W.R.号の航路

## 第2陣出発前インタビュー

# 世界の仲間との交流が楽しみ 出発前のトレーニングも万全

1984年次派遣青年第2陣、戸上忠顕君、橋本かおりさん、伊藤由樹子さんの3人に出発前のインタビューを行ないました。

——出発にあたって、とくに用意したものは何ですか？

伊藤 リュックサックは、借りて、靴は何種類か買いました。

橋本 レインウェア、サングラスなどです。

戸上 安全靴がいいか、スニーカーがいいか、靴の種類で迷いました。

——この旅のためにどんなトレーニングをしましたか？

戸上 ダイビングスクールへ通いました。

伊藤 救急法を学び、救助員免許を取りました。

橋本 私も、救助員免許を取りました。また、スキューバダイビングのライセンスも取りました。丹沢で沢登りもしました。

### 船や海が好きだから

——ORに応募した動機は？

橋本 4月2日の朝日新聞でORのことを知り、人生の転機を求めているときでもあり、ORの条件が自分にぴったりだったので応募しました。企画の内容にも興味がありました。

伊藤 帆船や海が好きだし、動いていることが好きだから。また、大学の専攻が、国際関係なので、国際的な活動に参加してみたかったから。

戸上 タダで船に乗れるから。また科学と奉仕をするということで、何か得るものがあると思ったから。世界中の人々との交流も楽しみです。

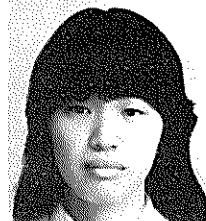
### 技術・知識を吸収したい

——今回参加するにあたっての抱負を話してください。

橋本 プロジェクトリーダーたちの技術、知識を吸収してきたいし、サー・ウォルター・ローリー号の科学探査船としての設備を見てみたいで

す。さらに大英帝國的発想のORにかかわっている人々の考え方や、参加した人々の考え方も……。

伊藤 外国人とのコミュニケーションを通じて、彼らの考え方を勉強したいと思っています。

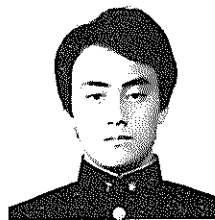


戸上 商船大学の学生として、それにふさわしい活動をしたと考えています。

### 自分の目的をハッキリもて

——これから出発する人々への言葉を一言ずつ……。

戸上 下調べをするとよい。また、事務局との連絡をこまめに。装備品については、専門家に聞くといいと思います。



伊藤 日本を紹介するものをもっていけばよいのでは……。とにかく体力をつけましょう。

橋本 ジョイニング・インストラクションを受け取ったときは、それをよく読むこと、また、ひとつでいいから自分の目的をはっきりもつことです。

### インタビュー追記

第2陣メンバーの女性2人、橋本さんと伊藤さんは、サー・ウォルター・ローリー号に乗り組みます。同艦が旗艦であることから、公式行事も多いのではないかと考え、パーティーやレセプション用に日本的な衣裳、つまり振袖が必要ではないか、といった女性らしい気の配りようでした。彼女たちの荷物のなかにそのような衣裳が入っていたかどうかは不明です。

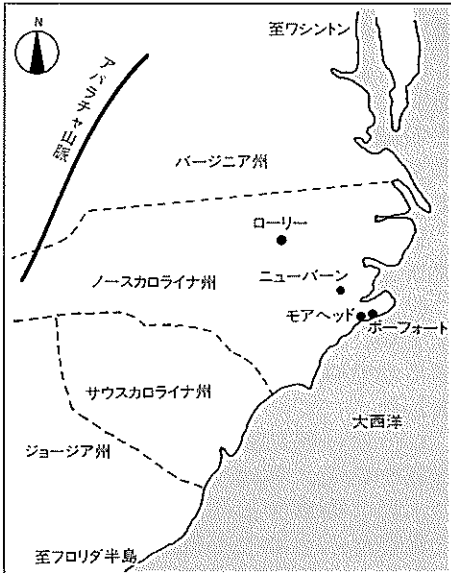
●オペレーション・ローリー  
ノースカロライナでの活動計画

ワニやクマの生態調査や自転車旅行

オペレーション・ローリーのノースカロライナ州での活動についてノースカロライナ委員会から次のようなレポートが届きました。

〔S.W.R.号の停泊〕

サー・ウォルター・ローリー号は、モアヘッド・シティの州港に停泊することになっています。



〔移動手段〕

ノースカロライナ委員会のボランティアが自動車や軽飛行機を用意しています。

〔宿泊施設〕

船の乗組員にも、メンバーにも宿泊施設を用意しています。

〔通信施設〕

停泊中の電話や郵便についてはハンプトン海洋博物館気付で手配されています。

〔科学活動〕

- デューク大学海洋研究室、ノースカロライナ海洋資源センターなどのレクチャーを受けます。
- 移動性の動物や絶滅の危機にある動物たちの生態調査(ワニ、黒熊、カモなど)。
- 養殖ウナギの観察や海産物採集。
- ノースカロライナ造船所の見学。
- ノースカロライナの航海史、海洋史、海賊伝説などの紹介。
- 小型飛行機やオートジャイロを使って野生ポニーを空から観察。
- ローリー卿のロアノーク・コロニーの調査。

〔コミュニティ活動〕

- ハンプトン海洋博物館のドックの修復作業。
- モアヘッド・シティのセンテニアル公園の補修の手伝い。
- O B 船員福祉施設訪問、奉仕活動。



▲S.W.R.号の船内科学探査室

〔冒険活動〕

- ノースカロライナの難破船の墓地への潜水。
- ポーフォートから自転車旅行。
- 廃村や孤立した地域の探検。

〔セレモニー〕

- モアヘッドとポーフォートで全参加者とスタッフの歓迎レセプション。
- ニューバーンまたは州都ローリーでの公式レセプション。
- 自転車旅行隊の到着時におけるマントオでの400年祭委員会のレセプション。
- 贈りものの交換会(記念植樹)。

1984年次OR日本代表青年  
全国5紙広告で紹介

「30の夢(ロマン)旅だつ」というキャッチフレーズの広告が9月下旬に掲載されました。掲載紙は日経、朝日、読売、毎日、中日の5紙、1984年次オペレーション・ローリー日本代表派遣青年30名を紹介したものです。



オペレーション・ローリー & 日本電装

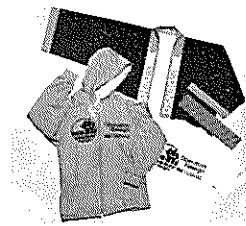
日本テレビ・フジテレビ系で  
「ゼブ号出帆」を放映

10月11日(木)ゼブ号は、セント・キャサリンズドックを出帆しましたが、この模様は、日本テレビ、フジテレビ系の海外ニュースで日本全国に放映されました。日本テレビ系は10月12日朝6時45分から、フジテレビ系は昼の11時30分からのニュースで、ともに、ロンドン特派員の報告というかたちで、出帆風景を映像で紹介していました。松井、桃井両君の様子もうつつっており、とても元気そうでした。とくに、テムズ川のタワー

ブリッジと、その下を航行するゼブ号の姿は印象的で、NDマーク入りのメインセイルが鮮やかでした。

ハッピーなどをプレゼント  
日本電装から参加青年たちへ

日本電装は、OR英国本部に対して、世界各国から参加する青年たちにプレゼントするTシャツ、ヨットパーカー、ハッピーを贈りました。いずれも、ORマークとNDマークを組合わせたデザインのもので、先発帆船ゼブ号に乗り込んだ16名の参加青年にもプレゼントされました。とくに外国人にとって、ハッピーは珍しいようで、ナイトウェアとしてピッタリだと喜んでる人もいるということです。



## 日本代表派遣青年のページ

## 厳しい訓練・充実した科学探査室

ゼブ号

サー・ウォルター・ローリー号

1984年次第1陣で帆船ゼブ号に乗りこんだ松井君、桃井君から乗船直後の様子を知らせるたよりがORJC事務局に届きました。この時点では、サザンプトンを中心にセイリングの訓練中ですが、本紙が読者に届くころは、リスボンからカナリア諸島への航海中の予定です。

## 語学力の大切さ痛感

桃井 和馬(JP0002)

お待たせしました。英国に到着した直後は本当に絶望で一色、すぐ日本に帰りたくなったのであります。しかし、現実には、いま私の住むべきところはゼブ号しかないのであります(つまり日本に帰る金がないのです)。ゼブ号に強制的に収容されてからは、何が何だか理解できず、今にいたっているのですが、それでもようやくイギリスとオーストラリアのナマリにもなれてきたのか、彼らの言葉がドイツ語から英語に変わりつつあります。それとともに、僕の英語はTodayからTodieへと変っていくのです。しか



▲帆船ゼブ号での作業訓練風景

しながら彼らはさすがに Selection Weekendを経ているので親切なことだけは確かです。

ところで装備のことですが、サー・ウォルター・ローリー号とゼブ号に乗る人はジャングル・ブーツなどぜんぜん必要ではありません。これらのフェイズでは、航海が中心ですから。そしてサー・ウォルター・ローリー号はどうか知りませんが、ゼブ号はスリーピング・バックが必要です。ベッドには、枕しかありません。シューズは、ウェリントンと書いてありましたが、それはクルーザー用のゴム長です。僕はこっちで買いました。きょう初めて海に出ましたが、やはりすごい風です。防寒具が重要です。カッパの上下はゼブ号で貸してくれます。

23人が小さなクルーザーで3ヵ

月生活するのでコミュニケーションが一番問題になるでしょう。また、船の操作にもかなり英語力が要求されます。やはり、海のうえでの操作には、全員の命がかかっているのですから。(なんて脅かしておかないと、みんなイージーになるからね。まあ、3ヵ月もすれば何とかなるでしょう) それでは、また……。

## 科学探査室に感動

松井 直弘(JP0001)

ゼブ号に出会ってから4日目の日没を迎えようとしています。3日、3月、3年が一番辛いときだといわれるように、昨日がとても肉体的、精神的にこたえました。でも、きょうは少し余裕が出てきて、周りを観察できるようになりました。きょうは、短時間のセイリングを行ない移りゆくサザンプトンの街並やクルーザーヨット、ウインドサーフィンの帆走ぶりをゆっくり見て楽しみました。

昨夜は、サー・ウォルター・ローリー号でナイトパーティがあり、そこでセカンド・エンジニアという、どことなくケンタッキー・フライドチキンおじさんに似た楽しい人と知り合いました。酒豪でジンを軽くあおり、俺はセイラーだと陽気に幾度も手を肩にまわし、赤銅色に日焼けした笑顔で、私が英語につまると、ノー・プロブレムとうれしそうに答えてくれました。まだまだこれから苦労が続きますが、何だか苦労を喜ぶような不思議なイタズラな気が働いています。

アドベンチャーだから当然のように、訓練は機能化、システム化されており、厳しいけれども恐らくはわれわれに多くのものを与えてくれると思います。ここに来るまではそれほど思わなかったけれど、このオペレーション・ローリーは頑張っ、磨けば磨くほど光る宝石のように、大切なすばらしいものを残してくれると思うようになっています。



▲ゼブ号のデッキで仲間たちと

ローリー号の船内で多くの科学探査室を見て、自然科学を学んできたひよっ子の私の眼からも、かなり価値ある研究が可能であると確信しました。各フェイズで多くの研究調査をすることになっていますが、ぜひその調査内容についての概要は最近の文献などで把握しておくことをおすすめします。

英国のOR本部は、世界の若者が集まり、ひとつのことをなしとげるといふ点に大きな意義をもたらせていますが、私は調査そのものに、より多くの意味を置いているように感じました。

ローリー号に乗って、あの科学探査室を見て、私はすごく感激しました。私の専攻する生態学もよく勉強できるだろうと心底この船に乗ってこれから研究できる人をうらやましく思いました。

2人とも、元気でやっていますのでご心配なく。

## 休暇にはホームステイ

松井・桃井両君は、約3週間の訓練期間中、サザンプトンを中心に活動していましたが、その間の休暇には、サザンプトンでのOR選考委員であるルージ夫妻邸に招かれ、ホームステイしました。ゼブ号の仲間でイギリス各地やオーストラリアからの参加組も、それぞれOR協力者たちの家庭に招かれ、休暇を楽しんだということです。



▲ルージ夫妻邸で